

「語り」のトキ節—日英対照研究の観点から

田 中 美和子*

Narrative *Toki*-Clauses—A Contrastive Study in English and Japanese

Miwako Tanaka*

Abstract

Narrative *when*-clauses do not have the same semantic functions as temporal *when*-clauses, according to several previous studies such as Declerck, R. (1991; 1997). Usually narrative clauses have the same form as temporal clauses but should not be treated as ordinary temporal clauses, because they have many characteristics in common with main clauses.

In fact, few studies have discussed the fact that some languages other than English have narrative clauses. Japanese *toki*-clauses have a use that is called “*monogatari-no-bun*” in Teramura (1992) and “*toki-no-settei*” in Masuoka (1997). In this paper I will contend that this use corresponds to narrative *when*-clauses in English and therefore they should be called ‘narrative *toki*-clauses’.

キーワード

語りのwhen節、語りのトキ節、時間節

0. 本論文で扱う問題

英語のみならず日本語あるいは他の言語においても、時間節の形態を持つ語り節が存在するように思われる。しかし、管見の限り、この問題は対照言語学の分野で十分に研究されていない。本稿は、英語学の分野で明らかにされてきた「語り」のwhen節に関する研究を手がかりに、このような時間節の形態を持つ語り節を、英語以外の言語について検討することを目的とする。中でも、日本語の時間節の一つであるトキ節の、非時間的な用法に注目し、これが語り節と共通の機能を持つことを仮説として提案したい。また、語り節が語りの文脈の中で果たす共通の機能を、スペイン語やフランス語も例にとりながら解明したい。

* たなか みわこ：大阪国際大学法政経学部非常勤講師〈2004.6.13受理〉

1. 語り節の定義

語り節は、デクラーク (Declerck 1997) によって、次のように定義されている。

- (1) *a narrative clause is one that 'push forward' the action in time and hence belong to the sequence of temporally ordered events that constitute the backbone of a narrative...* (Declerck 1997: 214)

また、これまで多くの先行研究が、英語学の枠組みで、語りのwhen節の機能や特徴を述べてきた。例えば、イエスペルセン (Jespersen 1940: 355) は「語り節は新しい事柄を導入する」と述べ、またクワーク、他 (Quirk, *et al.* 1985:1084) は「語りの中で最重要の情報を表示する」と述べている。つまり、語りのwhen節は、基準的when節の持つ時を特定する機能の代わりに、より重要な出来事を語りの中でドラマチックに強調する効果を持ち、その結果、語りのwhen節において、それまでの文脈からは容易に予期されない場面が展開されることが多いのである。

そもそも「語り」とは、一連の出来事を言語によって再現する手法である¹。そして、出来事とは、時の流れと共に刻一刻と変化するものであり、それは丁度、紙芝居のページが繰られるように、語りの中で言葉による場面が展開すると考えられる。そして、場面から場面へと語り継いでいく際に、語り節は、特に重要な場面転換を読者に効果的に示す道具となる。語り節の構造で表示される前件と後件は連続して起こり、より中心的で印象的な出来事は後件で示されると考えられる。

したがって、語り節の二つの大きな特徴は、連続性 (sequentiality) と卓越性 (prominency) であると考えておいて良いだろう。そして、これらはどちらも時間節には見られない特徴であることを、ここで確認しておく。

2. 語りのwhen節の分析

語りのwhen節 (narrative *when*-clause)² は、先行研究、例えばグリーン (Green 1974)、デクラーク (1991; 1997)、坪本 (1998) においてさまざまに議論されてきた。以下に述べるように、語りのwhen節は、時間節である基準的when節と異なる、語り節独特の振る舞いをみせるのである。

最初に、基準的when節の機能とふるまいを、具体的に確認してきたい。

基準的when節は、主節に後続し、主節に起こる出来事より前に起こる出来事を表示する。その上で、主節の事態を副詞的に修飾し、時を特定する機能を持つ。

- (2) You will see him *when* he comes.

例文(2)を検討してみると、主節が未来形であるのにwhen節は現在時制であることから、when節の現在形は未来の代用であることがわかる。したがって、例文(2)にみられる

when節は時の副詞節であり、主節に後続して典型的な基準的when節として機能していることがわかる。それゆえ、例文(2)のwhen節は、主節を副詞的に修飾し、主節の事態が起こる時を特定する時間節であり、次のように前置することも可能である。

- (3) *When he comes, you will see him.*

なお、複文において、二つの事態が何らかのつながりを持つ出来事として一つの文にとりあげられているが、これらの事態には、際立って認知される事態と、その背景となる事態があるといえる。これらは、図となる事態と地となる事態、すなわち前景的事態と背景的事態として理解することができる。タルミー (Talmy 1978) は次のように述べている。

- (4) *A larger, temporally-containing event acts as Ground (in the subordinate clause) with respect to a contained event as Figure (in the main clause).* (Talmy 1978:640)

例文(3)の場合、基準的when節の出来事「彼が来る」という状況および時間の中に、主節の出来事「あなたか彼に会う」という出来事が含まれると考えられる。従って、when節の事態は「背景的」であり、主節の事態は「前景的」である。

これに対し、語りのwhen節と呼ばれる用法は、常に主節に後続し一決して前置されずーそしてwhen節では主節より未来に起こるもう一つの事態を表示する。また語りのwhen節は主節を副詞的に修飾しない³。すなわち、主節の事態が起こる時を特定する機能を持たないのである。それゆえ前景的である。

- (5) a. I was sitting in the drawing-room *when* suddenly John came in.
b. I was just going to lock the door *when* the doorbell rang.
(Declerck 1997: 212)
c. We had just come to the swimming pool *when* it started raining.
(Heinämäki 1978:27)
d. I was playing the piano, *when* there was a knock at the door.
e. I was watching the television, *when* suddenly the lights went out.
(Quirk, et al. 1985:1084)

例文(5)はいずれも語りのwhen節を示す例文である。全ての例文において、主節とwhen節がともに過去時制であるが、このことは主節の事態が起こってからwhen節の事態が起こるという語り節の表す連続性を妨げるものではない。

主節の事態は、例文(5. a, b, d, e)では過去進行形、また(3. c)では過去完了と、どの場合も、その文法形式がコムリー (Comrie 1976) のいう未完結的アスペクト (imperfective aspect) を示している。すなわち、主節の事態は線的であり、背景的なのである。なぜな

ら、未完結的アスペクトを持つ事態は時間的範囲が明確には定められておらず、したがって、これらの例の場合、when節の事態が始まったときに主節の事態は既に開始されており、さらにwhen節で起こる事態の間中、あるいは少なくともその事態の一部分の間は続いてたと認められるからである。つまり、when節の事態は主節の事態に含まれているのである。

一方、when節の事態は、例文(3. a, b, c, d, e)において全て、完結的意味を含む単純過去時制で表されている。すなわち、コムリー(1976)のいう完結的アスペクト(perfective aspect)を持っているのである。それゆえ、それぞれの事態は点的であり、前景的であると言える。

そして、語りのwhen節の持つ特徴および制約は、先行研究より次の様にまとめられる。

- (a) 語りのwhen節は、“and then”を用いてパラフレーズできる。基準的when節は、このような言い換えを許さない。
- (b) 語りのwhen節は、「いつ主節のできごとが起こったのか」という質問の答にならない(i.e. 疑問の焦点にならない)。一方、基準的when節は、このような疑問の焦点となる。
- (c) 語りのwhen節は、断定する機能を持つ。一方、基準的when節は、もともと事実であることが前提とされているので、非断定的である。
- (d) 語りのwhen節は時を表す他の副詞類に置き換えられない。一方、基準的when節は、“at the time that~”等に置き換えられる。(Declerck 1997:212-3)

語りのwhen節は、もともと主節の時を特定する機能を持っていない。その代わり、新情報を断定する機能を持つのである。新情報は、普通、聞き手にとって真偽が不明なものであり、話し手はこれを断定しておかないと情報として伝達する価値が無くなる。したがって、when節において完結的アスペクトをもって述べられた事態は、その事実性が断定されるのである。

一方、基準的when節は、時を特定する機能を持つものの、接続詞whenの時を表す用法の性質からその出来事が実際に起こることがもともと前提とされるため、さらに断定する必要は無く、断定する機能を持たないと考えられる。

また、語りのwhen節は時を表さないの、時を表す他の表現と交換できないのは、当然のことである。

さらに、語りのwhen節は、あらゆる点で基準的when節と異なる性質を持つだけではなく、むしろ、次のように相容れない「逆」の関係にあるとすることができる。第一に、情報構造において逆の機能を持つ。語りのwhen節はより重要な情報、特に新情報を提示するが、基準的when節の場合はより重要でない情報、特に旧情報を提示し、主節の方がむしろ重要な情報を提示するのである。つまり、語りのwhen節の情報構造は、基準的when節のそれとは逆なのである。

第二に、主節とwhen節のどちらが時を特定するのかという点で、語りのwhen節を含む

文では、when節が主節の時を特定するのではなく、むしろ主節がwhen節の事態の時を特定すると考えられる⁴。基準的when節の場合は、もちろん、when節が主節の事態の時を特定するのである。したがって、語り節を含む文においては、主節とwhen節の時の規定関係は、基準的when節を含む文のそれとは逆になるのである。

第三に、主節とwhen節の事態の時間的前後関係である。語りのwhen節を含む文においては、when節の事態は主節の事態より後に起こるのである。一方、基準的when節を含む文においては、when節の事態と主節の事態は同時、あるいはwhen節の方がより先に起こることになる。したがって、時間の流れの中で、主節の事態とwhen節の事態の時間的前後関係は、語りのwhen節では、基準的when節のそれと逆になるのである。

これらの特徴から、基準的when節と、語りのwhen節では、同一の接続詞whenが、「逆」の意味を表示するために用いられているのであり、二つのwhen節は、異なる用法であると言える。基準的when節は典型的な時間節として機能し、主節の時を特定して、副詞的に、そして背景的に振る舞う。一方、語りのwhen節は、デクラーク (Declerck 1997) が言うように、主節の時を特定せず一逆に主節がwhen節の時を特定し一副詞節としてではなくむしろ主節として、前景的に振る舞うのである。

しかるに、語りの構造の中では、文法的主節と文法的従属節は、その意味機能を逆転させて、文法的な従属節によって主節的特徴を示し、文法的な主節は、むしろ一状態動詞の採用、進行形や完了という未完結的アスペクトを用いることによって一背景的な「地」として機能する傾向を持つと言えるのである。

この語りの構造の性質は、タルミー (Talmy 1978) によって、認知文法の観点から、前景と背景の反転、すなわち複文の中で図と地の反転が起こるのだと説明されている⁵。もし、語りの構造における図と地の反転が人間の認知に基づくものであるならば、英語以外の言語においても、同様の現象がみられて良いはずである。では、英語以外の言語において、同様の用法が見られるのであろうか。次の節では、この問題について、対照言語学の観点から、分析を進めていきたい。

3. 語りのquand節と語りのcuando節

英語以外の印欧諸言語における語り節を、検討してみたい。英語のwhenに相当する、フランス語の時を表す接続詞であるquandや、またスペイン語のcuandoに同じ用法がみられるようである⁶。最初に、フランス語の例を見られたい。

(6) J'achevais mon travail quand Paul est venu. (*Petit Royal* 1986: 1130)

(Lit. I was finishing my job when Paul came.)

プチー・ローヤル仏和辞典(1986)では、quand節の方が主節より主要な意味を担うと説明されている。このquand節の用法は、まさに英語の語りのwhen節に対応するものである。したがって、この用法を、語りのquand節と呼んでおく。次は、スペイン語の例を見てみたい。

- (7) Estaba hablando animadamente con tu hermano *cuando* de pronto me acordé de que había dejado el gas abierto. (García Fernández, Luis 1999: 3177)
 (Lit. I was speaking animatedly with your brother *when* suddenly I remembered that I had left the gas open.)

例文(7)の*cuando*節では、新しい事態の出現を述べているだけではなく、*de pronto* (suddenly)により、それが予期に背く出来事であることも示されている。この*cuando*節の用法も、まさに英語における語りの*when*節に対応する用法であると判断することができる。したがって、この用法もフランス語の場合と同様に、語りの*cuando*節と呼んでおく。

また、語り節が語りの文脈の中で果たす共通の機能についても、確認しておく。語りの*when*節と同様、語りの*quand*節と語りの*cuando*節の両方が、連続性(sequentiality)と卓越性(prominency)を持っており、そして、明らかに時間節として機能していない。さらに、それぞれの事態がもつアスペクトから、前景と背景の反転、すなわち複文の中で図と地の反転が起こっていると解釈してもよいだろう。

4. 語りのトキ節

次に、英語とは何の関係も持たない、膠着言語である日本語について考えてみたい。日本語では、時間節の一つであるトキ節が、語り節としての用法を持っていると思われる。この種のトキ節を、寺村(1992:155)は「物語りの文」と分類し、さらに益岡(1997)は「時の設定」をするトキ節と述べている。しかし、管見の限り、この日本語のトキ節は語り節としての明確な位置付けが未だされておらず、これらの研究以外では、取り上げられていない様である。

まず、寺村(1992: 150-6)におけるトキ節の分析をみていこう。寺村(1992)は、トキ、トキニ、トキハという時間表現が一般に入れ替え可能ではないことに注目し、次の様に述べている。

- (8) (i) pトキハq: この形が最も適当なのは次の場合である。
 (a) pトキqが一般的な決まりを表しているとき
 (b) 一回きりの事象でも、qがある状態を表しているとき
 (ii) pトキニq: この形が最も適当なのは、一回きりの事態の発生を報告する文の場合である。
 (iii) pトキq: この形は上のどの場合にもほとんど使用可能だが、特に、話し手がまずpという事態を述べ、次にそれに続いて起こったことを、いわば発見として述べる場合にはこの形が最も適当である。(寺村1992: 153)

すなわち、トキ節には、主節の時間を特定する用法(i)、(ii)と、そうではない特別の用法(iii)があると言うのである。これは、英語の*when*節に時間節としての用法と語り節と

しての用法の二つがあったことと並行する。そして、語りの表現に相当すると思われるトキの用法(iii)では、後続する主節の中に「発見」として述べられる新情報が来ることを示す機能があると述べられている。つまり、語りの中で、重要な出来事を強調する効果を持つと言える。さらに、「昔話のように、次々に時の流れに沿って出来事の進展を述べる」というような文章ではトキが最もよく使われる (p.155)。と説明されている。

また、寺村 (1992:155-6) は、トキ節を次の三種類に分類している。

(9) pトキq: 三種類のトキ節

- (i) 題術の文: トキ節は、pという時の点もしくは幅を、話題として掲げ、その時にどういう事象があるか、あったかを述べる形式である。
- (ii) 陰題⁷の文: トキ節は、qという叙述内容を時間の上で限定し、具体化している。主節のqは陰題となっている。
- (iii) 物語りの文: トキ節は、pという事態を新情報として伝え、その時点で、あるいはそれに続いて、qという事態を、続く新しい情報として述べる、そういう物語の文である。

寺村(1992)に従えば、接続表現トキは、語りの文脈の中で連続した場面の展開を示し、特に後続の節—日本語の場合は必ず主節となる—で卓越性を持った事態が示されるということから、英語のwhen節に対応するような、時間節の形式を持った語りの用法であると言っていいのではないだろうか。本稿は、寺村(1992)の「物語りの文」は、語りのトキ節であると主張する⁸。

ただし寺村(1992)でも述べられてはいないが、語りのトキ節は、フランス語の語りのquand節やスペイン語の語りのcuando節がそうである程には、語りのwhen節と平衡していない。なぜなら、すでに述べたように、日本語は膠着言語であるので、屈折言語である印欧語とは多くの統語的差異があり、それに伴い多くの意味の違いが生まれてくるからである。例えば、日本語は語順が固定されているので、トキ節は基本的に前置され、その時制は一大抵の場合—主節にゆだねられる。したがって、日本語においては、語りのトキ節が含まれた文において、トキ節と主節の事態の逆転、すなわち前景と背景、また図と地の反転は起こらない。つまり、日本語の語り節とは場面から場面の移り変わりを描く用法であって、主節の事態を背景に語り節の事態が前景化することは無いと言って良いであろう。

従って、この種のトキ節 (9.(iii)) は、時間節ではないという点と、新しい事態 (新情報) を提示するという点で、語り節としての特徴を持つが、語順が固定されているため、主節と従属節の逆転はないのである。

また、時の指定を行う基準的when節は、格助詞を伴うトキニ節に典型的に対応すると言ってよいだろう。場所論の観点からは、格助詞は場所を指定する機能があると考えられる。したがって、格助詞のニを伴うトキニという接続表現が、主節の事態の時間的位置を指定することは、自然なことである。

次に、益岡(1997:139-156)を検討してみよう。益岡(1997)は、トキ節とトキニ節に対して統語テストを行い、次の様な違いを確認している。

- (10) (i) pトキニq: (a) トキニ節は焦点化することができる。
 (b) トキニ節に疑問語が現れる。
- (ii) pトキq: (a) トキ節は焦点化することができない。
 (b) トキ節に疑問語は現れる。

問題のトキ節を含む文について、益岡(1997)は、焦点化することができず、また疑問語が現れると説いている。「焦点化することができない」とは、益岡(1997)によれば「qノハ、pトキダ」と言い換えられないということであり、「疑問語が現れる」とは「何をしているトキ、qですか」と疑問語を含んだ文にできるということである。焦点化できないのは、トキという接続表現が語りの用法で用いられており、いわゆる「時」を示しているのではないからであろう。「qノハ、pトキダ」という表現では、トキで提示された事態pはqがいつ起こったのか、その時間を特定することになるからである。また、疑問語が現れるのは、トキ節が新情報を表示できるからである。そして、これら二つの特徴は、(10(ii))のトキ節が語りの用法であることを妨げないものである。

ただし、益岡(1997)は、寺村(1992)を踏襲しているものの、トキ節の用法について寺村(1992)がしたようにさまざまな用法があるとは捉えていないようである。むしろ益岡(1992)は、焦点化できるかどうかという統語テストの結果から、接続表現の性質の違いは、格助詞の有無によって起こると一般化してしまっている。つまり、格助詞を伴う時間表現は、事態を時間的に位置付ける機能を持つ格成分を構成し「時の特定」を行うが、一方、格助詞を伴わない時間表現は、事態の叙述に必要な、前掲的(予備的)情報を提示する状況成分⁹を構成して「時の設定」をするというのである。したがって、益岡(1997)の示した根拠によれば、トキ節とトキニ節は共通の意味特徴を持たないことになるであろう。

また益岡(1997)は、トキは「時の設定」をするのだと述べている。しかし、「時の設定」と呼んでいる機能は一体何であろうか。どうも、主節の事態より先に起こる事態を「時」と呼んでいるようである。先に明らかにしたように、トキという接続表現は、主節の時間を特定していないトキを焦点化することはできないのであるから、むしろこの用法は、寺村(1992)の言うように「物語りの文」、あるいは本稿のように「語りのトキ節」と呼ぶ方が、誤解が少ないのではないだろうか。語りのトキ節で示される重要なことは、主節の出来事がいつ起こったかではなく、pそしてqと、新しい二つの場面が引き続いて展開されることである。

では、今まで述べた日本語の語りのトキ節が、英語の語りのwhen節に対応するのかどうかを、日英対訳の小説から、拾ってみたいと思う。次の例では、語りのトキ節と語りのwhen節が対応している。

- (11) 三度チャイムを鳴らして、いい加減待ちくたびれたトキ、不意にドアが開い

て、四十がらみの、ややくすんだ感じの男が出て来た。[真夜中のための組曲]

- (12) After ringing the bell three times, she was beginning to give up hope *when* the door was suddenly opened by an undistinguished man who looked to be in his mid-forties. (translated in Gavin Frew 1984)

日本語の原文(11)でトキ節が含まれる文に対して、英語の翻訳文では、(12)にあるように語りのwhen節が用いられている。また、日本語では前置されたトキ節で表される事態は英語では前置された主節で表され、日本語では後続する主節で表される事態は英語では後続するwhen節で表される。すなわち、同じ事態が、文字化される順番こそ同じであるが、主節か従属節かという点では逆に表示されるのである。膠着言語である日本語の語りの構造の中では、まずトキ節そしてそれに続く主節において、その順で引き続いて起こる二つの事態が表現されている。一方、膠着言語である英語の場合、まず主節そしてそれに続くwhen節において、その順で引き続いて起こる二つの事態が表現される。(11)のトキ節は、語りの構造を形成する際に、語りのwhen節と見事に呼応した機能を持っていることから、「語り」のトキ節であると判断できるだろう。

5. まとめ

以上、日本語の時間節においては、トキ節が、英語の語りのwhen節に対応する「語り」の用法を持っていることを確認することができた。また、英語と同じ屈折言語であるフランス語のquand節およびスペイン語のcuando節には、語りのwhen節とほぼ平衡した用法が見られ、一方、膠着言語である日本語の語りのトキ節は、英語のwhen節とは、統語的、また意味機能的にかなり違いがあることも確認した。

語りのwhen節、語りのトキ節、語りのquand節、そして語りのcuando節の全ての用法に言えることは、語り節というものが、第一に時間表現から派生すること、第二に同じ形式の時間節に融合されていること、第三に接続表現は全て*and then*と中立的に言い換えられること、そして第四に後件に重要な出来事が提示されることである。

本稿は、時間節表現から発展した語り節、特に日本語の語りのトキ節に焦点をあて、これが英語の語りのwhen節に対応する語りの機能を持つ表現であり、フランス語のquand節やスペイン語のcuando節とは異なり、統語的、また意味的に語りのwhen節とは大きな差異があることを明らかにした。

世界に絶え間なく起こる事象の中で、話し手が、ある二つの出来事を、連続したものとして取り上げて語るとき、語り節にとって最も重要な機能は、物語を前に進め、より中心的で印象的な場面を明確に提示することである。語り節は、少なくとも、このような機能を共通して持っていると言えるのではないだろうか。

さらに、英語の*as*節や*until*節、そして日本語のアイダ節にも、語り節として機能する用法があるのではないだろうか。これらに関しては、稿を改めて論じてみたいと思う。

注

- ¹ ラボフ (Labov 1972: 359—60) を参照。
- ² グリーン (Green 1974) では「主節現象 (main clause phenomena)」、坪本 (1998) では「『語り』の when 節」とさまざまに名づけられている。
- ³ デクラーク (Declerck 1997: 219) は、語りの when 節が副詞的機能を持たないと述べている。
- ⁴ それゆえ、語りの when 節は、「主節の状況が成立している時に (間に／後で) 何が起こったのですか」という質問の答になる。
- ⁵ 田中 (2002) を参照。
- ⁶ スペイン語の cuando の用法については、大阪外国語大学、和佐敦子先生にご教授いただいた。
- ⁷ 寺村 (1992: 156) は、陰題とは三上章の用語であると述べている。
- ⁸ 寺村 (1992: 156) は、物語りの文は、「英語の when-clause についてもいえる (p. 156)」と付記したが、詳しく述べていない。
- ⁹ 益岡 (1992) は、限定的な副詞的機能を「格成分」、一方、ゆるやかに状況設定をする機能を「状況成分」と呼び区別している。

参考文献

- Comrie, B. 1995 (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusya.
- . 1997. *When-Causes and Temporal Structure*, London and New York: Routledge.
- García Fernández, Luis. 1999. “Los complementos adverbiales temporales. La subordinación temporal.” *Gramática descriptiva de la lengua española* 2, Madrid: Espasa Calpe. pp. 3129-3208.
- Green, M., G. 1974. “Main Clause Phenomena in Subordinate Clauses.” *Language*. Vol. 52.2. pp. 382-97.
- Heinäsmäki, O. 1978. *Semantics of English Temporal Connectives*, Indiana University Linguistic Club, Bloomington. (Copyright 1974)
- Jespersen, O. 1965 (1940) *A Modern English Grammar Part Five*. London: George Allen & Unwin LTD, Copenhagen: Ejnar Munksgaard.
- Labov, W. 1972. “The transformation of experience in narrative syntax.” In W. Labov (ed.), *Language in the Inner City*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, pp. 354-96.
- 益岡隆志. 1997. 『複文』 東京: くろしお出版.
- Quirk, R. and S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik, 1985. *Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Talmy, L. 1978. “Figure and Ground in Complex Sentences.” In Joseph H. Greenberg (ed.), *Universals of Human Languages*, vol. 4, *Syntax*, pp. 625-29. Stanford: Stanford University Press.
- 田中美和子. 2002. 「語りの when 節の意味特徴」『英語コーパス研究』第9号、英語コーパス学会、pp. 81-92.
- 寺村秀夫. 1983. 「時間的限定の意味と文法機能」『副用語の研究』 東京: 明治書院、(『寺村秀夫論文集 I』) (くろしお出版 1992) 所収
- 坪本篤郎. 1998. 「『語り』の文連結」 赤塚紀子、坪本篤郎 (著) 『モダリティと発話行為』 東京: 研究社出版、pp. 134-54.

引用文献

- 赤川次郎『真夜中のための組曲』 角川書店、1981.
- (*Midnight Suite*. Trans. Gavin Frew Kodansya International, 1984.)
- 向田邦子『思い出トランプ』 新潮社、1980.
- (*A Deck of Memories*. Trans. Adama Kabat Kodansya International, 1992)
- Petit Loyal, *Dictionary Français-Japonais* 旺文社、1986.